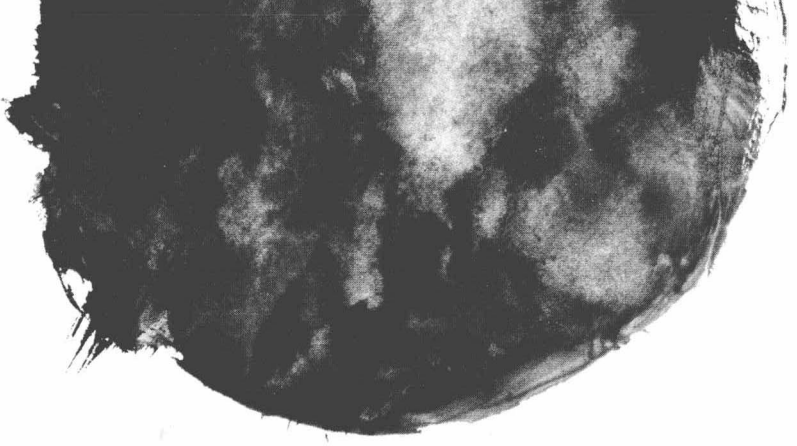

# 青い闇の記録 上巻

畑 正憲

毎日新聞社

青い闇の記録（上）

定価　六五〇円

昭和四十八年十一月十日　印刷
昭和四十八年十一月二十日　発行

著者　畑　正憲
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町
〒八〇二　北九州市小倉区紺屋町

印刷　東京ベル印刷　製本　大口製本

0095-507011-7904

# 青い闇の記録(上)・目次


一の章　黒い影　5
二の章　再会　65
三の章　原始境　123
四の章　黒毛　181
五の章　告白　251

装幀　横塚　繁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 青い闇の記録（上）

# 一の章　黒い影

風がでて霧が動いた。

梢が騒ぎ草がこすれ合う。夜明け前から山を占領していた小鳥の声が焉んだ。

風は大地の起伏をなぞるように吹き、霧を含んだいくつもの重い流れとなって、山頂へと駆けあがって行く。途中、ぽっかり口を開けた沢の上部で合流し、鋭くひょうと鳴った。

濃い霧だ。

ダケカンバの白い幹でさえねずみ色に沈んで見える。樹海のすべてが色を失い、深い海の底でざわざわと揺れる海草を思わせた。

やがて霧が割れた。明るさが増してくる。吹上げられて反転した闊葉樹の葉裏が銀色に輝いた。

風の息遣いに合せてそうなるのか、どこかに貯っているものが運ばれてくるのか、霧に濃淡が生じた。千切れ雲に似た大きなかたまりが通過するとき、復活していた鳥の歌がまたとだえた。

と――

ハイマツの繁みから一頭の雄のヒグマが現れた。それまで草の根を食べていたらしく、口の周りの短い剛毛には新鮮な泥が附着している。

彼は見通しが効く場所に出るのが不安らしく、鼻だけを左右に曲げて風の匂いを嗅いだ。

五分。
十分……。
表情に変化が現れないことから推すと、何も異常を感じとっていないらしかった。しかし彼は四つん這いになったまま霧が晴れるのを待つ。
右の肩口に三日月型の斑があり、四肢と腹は夜のように黒い。脊中の毛に艶がなく、赤茶けて見えるのは換毛期のせいだ。一旦浮いた下毛が脱けない金毛にからみつき、背にさびた衣をかけているようだった。
霧が晴れると、ヒグマは後肢で立ち、目指す鞍部を中心にして左右を丹念に眼で点検した。
むろん、匂いを嗅ぐのを忘れてはいない。鼻孔がひくひくと震えている。
ヒグマはそれから歩を踏出した。こそとも音はしなかった。
すでに霧は沢の奥にしか残っていなかった。それは遥か下の原野から吹上げられてくるものであり、細い水流の上に密集した木々の梢の間から、白く清浄な煙となって立昇った。ときにはやさしく、ときには勢いよくめらめらと。
鞍部で眠りについたヒグマは、警戒をといたわけではなかった。その証拠に、部厚な丸い耳が外界の音に敏感に反応していた。瞬時も動きやまぬその耳だけを見るならば、人はこの世で最も臆病な動物が仮睡していると思うことだろう。
眼はとじていた。腹をぴったり大地につけ、後肢を二つに折っている。
毛は乾いていた。紫がかったなめらかな足のうらから立昇るのは体内で蒸された汗。表面でふっとゆ

らぎ、五筋六筋、細い糸になっている。
午前七時にはまだ間があった。

## 1

江間信子は正面の時計を見た。
七時前十二分——
舌打ちをしたい気持だった。信子が予約した飛行機は、九時十分発の第三便である。彼女は胸の中で何度目かの愚痴をもらした。
——母ちゃんとくると、これだから厭になっちゃう。出発の三時間前に詰めかけるなんて気違い沙汰だわ。
それからすぐに反省した。
——いけない……罰が当る。とうとう北海道行きを許してくれたのだし、それに……父ちゃんが死んでから十年もの長い間、一人で頑張って二人の子供を育ててきたのだもの。気を張りづくめだったでしょうし、少々せっかちになっても仕方ないわ。
羽田空港の国内線出発ロビーは、七時を境にして慌しさを増した。
各航空会社のアナウンスが始る。売店のシャッターが開く。ロビーの奥にある食堂の前に人だかりができた。
だが信子たち親子のように、ソファでぼんやりしている客はごく僅かだった。

ゴールデンウィークが十日前に終り、空港はすっかり平常の落着きを取戻していた。客のほとんどがネクタイをきちんとしめたビジネスマンで、入ってくるなり受付に直行し、さっそうと搭乗口に消えて行く。

——そう言えばそうね。

と、信子はまた自分に語りかけた。

——駅でも空港でも、朝早くから待合室でボケーとしている人には、しゃっきりしないのが多いようね。

信子の前に坐っている年配の婦人たちは、ソファの上に風呂敷包みを山と積上げ、愚にもつかないことを声高に喋りまくっている。

——でもわたしだって同じ穴のムジナだわ。

信子はクスリと笑った。

初めてはいたジーパン。黄色のセーターに赤いジャンパー。底がぺったりしたズック靴をはいた姿は、あまり格好がいいものじゃない。どれも湯気が立ちそうな新品ばかりだった。

母の久子が訊いた。

「どうしたの」

「え?」

「思い出し笑いなんかして」

「あら、何でもないのよ」

と、信子は努めて明るい口調で、



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「ぜえんぶ新しいもの着てるでしょ、なんだか土管の中に入ってるみたいで、それで笑ったの」
「笑いごとじゃないわよ。これからはよほどしっかりしなくっちゃ」
「はい」
「手紙を書くのよ」
「はいはい」
「しっかりしなさいよ」
「はい、分りました」
素直にうなずいて顔を上げた信子は、表情をはっと硬くして眼を伏せた。
——あいつ、変な男。厭なやつ。
その男が信子を見詰めていることはとっくに気がついていた。
かなり前、初めて視線が合った時、その男は許しをこうようなぎごちない笑みを浮べ、話しかけたそうな気配を見せた。だがまったく知らない男だったので、信子はきっと睨みつけてそっぽを向いた。
それからというもの、視線が合うと、男はどきまぎして先に眼をはずした。
彼女は、娘を一人で旅に出す母の気持が分っているつもりだった。それだけに見知らぬ男から声を掛けられたりしたくなかった。
信子は面倒なことが嫌いな性質だった。高校を卒業して会社に勤め始めた春、長かった髪を切ってパーマネントをかけた。
が、その後のわずらわしいことったらなかった。たとえば眠る前に髪をくるくる巻いてセットしなけ

ればならないなんて、一度は母の真似をしてみたいなどと思ったりしていたのだが、実際に自分でやってみると、結構時間と手間を喰うし、第一、ゴワゴワして安眠出来なかった。だから信子はパーマなんて一度で懲り、以後引詰めにして後ろで束ねている。

それから三年と少々、切った髪は長く伸びた。それを束ね、無雑作に垂らしている。

化粧もほとんどしていない。アイシャドウなど試みたことがないし、口紅さえつけていない。

それでも充分に魅力的であることを彼女は知っていた。

どちらかといえば丸顔だったが、いわゆるファニーフェイスではなかった。鼻筋がきちんと通り、唇は薄い。その造作が整い過ぎているのが欠点でもあり、まじめに執務している時などには、輪郭と眼鼻立ちがアンバランスになった。しかしそれは欲というもので、笑うと八重歯がこぼれ、万人に好かれる若さが匂った。

だが——

先程から信子に執拗な視線を送る男は、お世辞にも美男子とは言えなかった。

黄土色のニッカーズボンの上が黒いスポーツシャツ。その粗末さには触れないとしても、顔と手、外に出ている皮膚が細かくめくれ上っていた。まるで熱病にでもかかった後のように。

それだけではない。襟足から耳の下にかけて、どす黒い吹出物がたくさんある。それは手の方も同様であり、最初彼女は腕時計のバンドかと思った。

きっと疱瘡にでもかかったのだわ。よくあばた面って聞くけど、きっとあれね。さわらぬ神にたたりなし。伝染ったら大変だもの……。

大望のある身だから、と信子は、ただ一つの荷物であるナップザックを引付けた。
男はまだ見ているらしい。彼女は右のこめかみの辺りにかすかな痛みを感じていた。

関上を見つけたのは久子の方である。
「あら、部長さんよ」
「まあ！」
信子は眼を見張った。
関上要助は彼女が三年有余勤めた玩具会社の重役である。会社をやめるに当ってはいろいろとお世話になったが、見送りにきてくれるなどとは思いもかけなかった。
関上は大きなストライドで近づき、
「やあ、随分といさましいな」
「お早うございます」
信子はピョコンと頭を下げた。
「うむ、お早う」
「部長さんが見送りに来て下さるなんて」
光栄だと続けるつもりの信子の袖を母が引張った。
「これ、何ですか。早合点するものじゃありません」
そうたしなめて置いて、

「これはこれは、この間から娘が無理なお願いを致しまして、にもかかわらず大そうなものをお頂戴しまして……」
「ははははは」
部長は笑いで久子の挨拶を押えた。それからいたずらっぽい表情を浮べ、
「今日は社用の出張ではありませんよ。お母さんと同じようにノブちんの見送りにきました」
「矢張り……」
「そうですよ。これが黙っていらりょうか、今様敵討ちですからなあ」
「……」
「ノブちん、いや江間君の目的は分っとるつもりです。本当は気が済んだらすぐ帰ってくるなどと言っとりますが、これは何年か腰を据えるつもりだなと私はにらんどります」
「あの……」
と、何か言いたそうにした信子の耳元で関上が素早くささやいた。
「分っとるよ。恥かしいのだろう。ま、ついてき給え」
彼は信子の手からナップザックを引ったくって先に立った。
「ノブちん」
「はい」
「二階へ行こう」
「はい」

「国際線のロビーの方が静かだし、何か食べねばいかん」
「はい」
「それがいかん。ノブちんがはいと素直に返事する時は、お腹が空いているのに決っとる。おっぱいにすがりつくのもほどほどにして、何か食べなさい」
「はい……」
「今から腹を空かしているようじゃ、ヒグマには勝てんぞ」
「……」
階段を上りながら、信子はこみ上げてくる甘酸っぱいものを必死で押えていた。
関上要助は一メートル八十を越す上背があり、肩幅が広い。その横に並んでいると、威圧されるどころか、包みこまれる感じがする。それが人間の包容力というものであろうか、彼は信子たち女子社員の間に圧倒的な人気があった。
「外人みたいに彫りが深いでしょう。そしてあの銀髪。銀座のバーではもてるそうよ」
とか、
「あら、それで独身なのかしら。二十歳台に奥さんを亡くして、それからずっとチョンガーだってね」
とか、関上のことなら細大もらさず知ることが出来た。
信子も関上部長が好きだったし、尊敬していた。だから会社をやめる際、誰よりも先に彼のところへ相談に行った。
ところが、退社の希望を聞くと関上は怒鳴った。

「馬鹿もん！　今やめられてたまるか。結婚以外の理由ではやめさせんぞ」
無理もないと信子は思った。給料を貰いながら仕事を憶えて、やっと働けるようになってやめるのでは虫がよすぎる。
だが、主張を曲げるわけにはいかなかった。信子には北海道へ行かねばならぬ差迫った理由があった。
それを聞くと、関上はべそをかいたようになり、
「なんだ、敵討ちか」
と呟き、それから一切やめるなとは言わなくなった。そればかりか、人事部と掛合って退職金を多目にふんだくってくれたし、札幌までの飛行機の切符を押付け、列車で発つ手筈を換えさせた。
今、信子は更めて寂しさを噛みしめている。せっかちな母、まるで父のような部長、にぎやかな会社、住みなれた東京――そのすべてをしばらく捨てねばならない。本当にいいのだろうか。思い切りよく捨ててしまって、見知らぬ土地へ越してしまっていいものだろうか。
取返しがつかないことをしているのではないだろうか。今だ……今のうちならここに残れる。そう思うと、自分の体がふわりと宙に浮く感じがした。
二階のレストランは空いていた。早朝だから出来る料理の種類は僅かだったけれど、その中から見つくろって、関上がほとんど独断で食べるものを決めた。
広い窓際のテーブルを選んで坐ると、関上が言った。
「江間君には一度断わられたのだがね、北海道にいる友人の住所を書抜いてきたよ。要らなきゃ要らないに越したことはないが、どうだね、受取ってくれないか」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com